

研究テーマ	<p>[IV 見方や感じ方を広げ、深めること]</p> <p>感じたことを自分で確かめたり、友達と話し合ったりするなどして、その見方や考え方を広げ、深めるための題材の工夫</p> <p>小学2年生「絵と話そう」鑑賞活動の実践を通して</p>
-------	--

下妻市立騰波ノ江小学校 教諭 松本 節子

1 はじめに

児童は、幼いころから、身近なものや人と触れ合いながら生き、身の回りにある材料や場所と出会い、自らそれらに働きかけて自分の思いを具現化するための能力を発揮している。自分の感覚でとらえた形や色、イメージから発想や構想を繰り返して、材料をもとに造形遊びを楽しんだり、さらには、その経験や材料の特徴を生かして、創造的な技能を高めていく。このような活動の中で、児童は、自分の表したいことを見つけて表したり、用途に合わせるための材料を選んだり、様々な表し方を工夫していく。それは、児童の発達とともに思いのままに表す楽しさから、自己を見つめ、他社や社会を意識した表現へと広がりを見せる。

また、自ら材料や場所等に働きかけると同時に、周りから働きかけられることで、見たり感じたりする力や考えたりする力、表現方法を工夫する力を伸ばし、よさや美しさを感じ取る鑑賞の能力も伸ばしている。様々な対象や事象を心に感じ取り、身の回りの生活や社会に対して自分なりに意味や価値をつくりだしている。それは、周りの人と共有したり、他者の感じ方を知ることで、さらに広がり深まっていく。

そこで、ここでは、児童が身の回りの作品などを鑑賞する活動を通して、見方や感じ方、考え方を広げ、深めるための題材の工夫をねらいとして実践したいと考えた。

☆研究の仮説

- (1) 自分や友人の作品以外の作品に触れることで、その面白さやよさを感じ取ることができるのではないかな。
- (2) 作品から感じ取ったことをメモや吹き出しを使ったつづやきに変えることで、見方や感じ方がより深まるのではないかな。
- (3) 作品から感じたことを友人と共有することで、見方や感じ方、考え方がより広まるのではないかな。

☆ねらいに迫るための手だて

- (1) 鑑賞作品には、ピカソの「泣く女」を使用する。キュビズムの表現により、児童は形や鮮やかな色使いに面白さや楽しさを感じ取ることができるのではないかなと思われる。また、形や線が単純で自分たちの作品などと比べてながら親しみを持って接することができるのではないかな、そして、写実的ではない作品であることにより、「絵」が伝えようとしていることを受け取ることに児童の意識が集中するのではないかなと思われる。児童には作家名や作品名は伝えないこととし、児童の作品から受け取る感覚を中心に授業を進める。
- (2) 作品をよく見て発見したことをメモすることで、感じたことの根拠を短い時間で再認識することができるのではないかなと思われる。また、作品の声をつづやきのように吹き出しに書くことで、児童の受け取った感情を言葉に変えて伝えることができるのではないかなと思われる。吹き出しは、色分けをしてワークショップ型として全員が参加して受けた感じをどんどん書いていくようにする。その際、理由付けや説明に限らず、次々と変化するイメージや感覚を大切にしたい。
- (3) 作品は、画像からA4サイズでプリントし、手もとで鑑賞することができるようにする。3人1組に1枚の作品を鑑賞し、個人やグループ活動が流動的に変化するようにしたい。個人のつづやきがグループに影響を与えたり、グループでの話し合いが個人の感覚に影響を与えることができるようにしたい。また、見方や感じ方、考え方を広げ深めるために、児童の体験や経験、想像のお話などに共感しながら話し合いを進めていきたい。

2 実践例

(1) 題材 「絵」と話そう

(2) 目標

- ・「絵」と話をすることに興味を持ち、「絵」からの声を聞こうとする。 (関心・意欲・態度)
- ・作品から感じたことを書いたり、話し合ったりして、作品の面白さや楽しさなどに気付くことができる。 (鑑賞の能力)

(3) 題材について

本題材では、友人とともに絵画作品を鑑賞し、感じたことや考えたことをつぶやいたり、メモや吹き出しを使って、簡単な会話の言葉に表す活動である。絵画作品は、ピカソの「泣く女」を使い、キュビズムの色や形の面白さや楽しさを感じることができるとともに、単純な色や形に親しみを感じ、感情がはっきりと表れているために、児童にとって受けた感じを言葉にしやすい作品である。

これまでに児童は、気に入った対象をじっと見たり、材料の感触を楽しんだりしている。また、自分の作品や友人の作品を進んで見たり、製作途中で確認したりと、鑑賞の能力を発揮している。作品からうけた感じや考えを声に出しながら製作する姿も見受けられる。これまで、この学級の中で取り上げてきた鑑賞の学習としては、製作の途中やまとめの段階で自分や友人の作品のよいところを認め合ったものであった。それらは、次の表現方法に生かすことを考えながらの活動である。

しかし、今回の活動では、鑑賞を独立して学習するもので、同じ作品を鑑賞する活動を通して自分だけでなく友人の見方や感じ方を知り、相互に交流することで、見て感じることもそのものを楽しむ鑑賞活動としたい。この活動は、児童に「絵」の声を聞いてみよう、話しかけてみよう、と呼びかけることで、今まで児童が見てきた絵本や教科書のさし絵などでは、文章などから感じてきたものを、絵の形や色などから感じとることができるようにしたい。児童にとっては、聞こえない声を聞き、話しかけるといふ意外性のある活動になるだろう。児童の気付きやつぶやき、作品から受けたイメージなどを大切に、共感的に活動を支援していきたい。さらに、発見したことをメモしたり、「絵」とのやりとりを会話文にして書き込んだりするなどの言語活動を通して、形や色などからうけた感じに気付きより深く理解できるようにしたい。

(4) 指導計画と評価計画（1時間取扱い）

次時	本時の目標	評価の観点		評価規準	言語活動の充実を図るための手立て
		発表	鑑賞方法		
1	「絵」に話しかけることに興味を持ち、作品から感じたことを書いたり、話し合ったりして、その面白さや楽しさなどに気付くことができる。	○	◎	作品から発見したことや感じたことをメモや吹き出しに書き込むことができる。	気付きや感じ取ったことをメモしたり、会話文を書き込んだりする場を設定する。

(5) 本時の学習

- ◇ 目標
 - ・作品から感じたことを書いたり、話し合ったりして、作品の面白さや楽しさなどに気付くことができる。
- ◇ 準備・資料
 - 鑑賞作品（泣く女）、吹き出し付箋（2色）、付箋用ボード、メモカード、筆記用具、感想カード
- ◇ 展開
 - (◎は言語活動の充実を図るための手立て)

学習活動・内容	指導上の留意点、評価 評は評価規準
1 本時の学習課題を確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> 「絵」と話そう。 耳をすまして、ほら声がきこえるよ </div> (えー声なんて聞こえないよ。) (ホント～?)	<ul style="list-style-type: none"> ・はじめに鑑賞作品を見せずに、「絵」からの声を聞いてみようと呼びかける。「絵」から声は聞こえるだろうか、音が聞こえるのだろうか、風などが吹いてくるのだろうか、と児童に問いかけ、本時の学習に興味や関心を持たせ、自ら作品に関わってこうとする意欲をもつことができるようにする。 ・この「絵」は、みんなに聞いてもらいたいことが、たくさんあるんだよ、と伝えて、そのためにたくさんの方の意見を聞き取りたい。発見してみようと呼びかけることで、作品と児童との距離感を縮めたい。 ◎たくさんの方のメモカードを用意して、次々に発見したことを
2 作品をよく観察して、発見したことをメモする。 (かみの毛がいろいろな色) (女の人) (へんな耳)	

<p>(かなしそうな目) (はをくいしばっている) (ぼうし) (つめ) (ハンカチ) (なみだ)</p> <p>3 吹き出しに聞こえてきたことを書く。 (かなしいよ) (くやしいよ) (えーん) (やだよー) (おねがいー) (おなかがいたいよー)</p> <p>4 聞こえた声に対して、話しかけることを吹き出しに書く。 (だいじょうぶだよ) (なかないで) (わたしもだよ) (しんぱいしないでね) (どうしたの?)</p> <p>5 学習のまとめをする。</p>	<p>メモすることができるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童それぞれが自分でメモしていくが、3人グループの中で自然に発せられる言葉やつぶやきを大切に、お互いが友人の言葉に耳を傾けながら活動できるようにする。 ・色や形の面白さや楽しさを味わうことができるように、時間を十分に使いたい。 <p>◎水色の吹き出し型の付箋に児童それぞれが、「絵」から聞こえてきた音や言葉を書き込み、次々とボードの作品に貼っていくことで、全員が参加できるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童が思いつくままに書き、理由や説明ではなく聞こえてきた声として書くことができるように、吹き出し型の付箋を作り、記入してすぐに貼り付けることができるようにする。 ・児童が、感じた感情を自分のことのように表し、声に出したり、身体全体で表したりすることを共感的に受け取り、認めていきたい。 <p>◎聞こえてきた声に対して、答えたり質問したりするなどの話しかける言葉をピンクの吹き出し型の付箋に記入し、次々に貼っていくようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・付箋を色分けすることで、一目で言葉が区別できるようにしたい。 ・前に書いた「絵」からの言葉に重ねて貼ったり、友人の貼った声に答えたり、声の背後の物語を考えたりと児童が自由に作品のイメージをもつことができるようにしたい。 ・3人のグループ内での話し合いは、つぶやきや書きながら言葉に出している中で自然の流れでできるようにしたい。 <p>評作品から感じたことを書いたり、話し合ったりして、作品の面白さや楽しさなどに気付くことができたか。</p> <p>(観察・メモ・吹き出し)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・作品やその周りに吹き出しを貼ったボードを黒板に掲示して、どのような声がか聞こえてきたか、どのような話しかけをしたかをグループごとに簡単に紹介する。 <p>◎感想カードに記入することで、本時の学習の振り返りができるようにしたい。</p>
--	--

3 研究のまとめ

(1) 自分や友人の作品以外の作品に触れることで、その面白さやよさを感じ取ることができるのではないかと考え、その手立てとして鑑賞作品に「泣く女」を使用した。子どもたちは、大変興味を示していた。「絵」から声を聞こうとする経験は今までになく、新鮮に受け止めていた。そのため、たくさんのことを発見してみようと呼びかけるとはじめは眺めていた児童も「そうだ。虫めがねを使っているいいですか。」などと言うこともあった。

女性の顔の形や色の発見のほかに、持っているもの、身に付けているもの、周りの様子に興味は尽きないようであった。作家や作品名を聞かれるかと思っていたが、そのことには誰も触れずに、子どもたちは目の前の作品に一生懸命に向き合っているという印象をうけた。子どもたちに自分たち以外の作品を見せたことは、



作品を知りたいという意欲につながり、より積極的によさや面白さを感じ取ることができたのではないかと思う。

- (2) 作品から感じ取ったことをメモや吹き出しを使ったつぶやきに変えることで見方、感じ方がより深まるのではないか、ということでメモ用紙や付箋紙を使った。メモ用紙をたくさん用意して、気付いたことをそのままにどんどん書いていく活動をした。目や口といったそのものから、悲しそうな目やくやしそうな口というものがあつた。また、形や色に注目しゆがんだ形、ぐじゃぐじゃのハンカチ、黄色いつめ、青い花などの感情の生まれる根拠となるものに迫るメモが多くみられた。



吹き出しは、色分けをして作品からの声と子どもたちが話しかける言葉に分けたことで、友人が書いた言葉に対してその言葉の元となる感情を理解して、さらにそれに合う言葉かけをするという活動が行われた。これは、自分の受けた感じを友人と共有することにつながった。

- (3) 3人1組のグループ活動により個人のつぶやきがグループに影響を与えたり、グループでの話し合いが個人の感覚に影響を与えることで、見方や感じ方を広げ深めることができるのではないかと考えグループ活動とした。体験や経験の違いによってそれぞれに感じ方の違いがあり、それが会話文に表れてくるが、その声に応えることで、お互いの感じ方を共有し、理解していることが分かった。さらに、グループの発表では、お互いの感じ方を代弁する姿がみられた。



- (4) 感想カードから

感想カードには、「はじめは声なんて聞こえないと思ったのに、本当に聞こえてくるんだ。」「この人は、ずっとお話したかったんだね。」「もっと、いろんな声を聞いてみたい。」などの感想が多かった。子どもたちは素晴らしい感性を持っていることを改めて再認識することができた。

4 今後の課題

本題材では、子どもたちが積極的に取り組み、楽しそうに活動していた。今後の課題として、本題材で学習したことを発展させてより見方、感じ方を深めていきたいと考える。いくつかの作品を用意して、子どもたち自らが作品に近づいていけるような指導を実践していきたい。そして、作品を見る面白さを感じてほしいと考える。

校内の作品展示などの環境にも配慮して、身の回りの生活や社会生活の中で、よさや美しさを感じ取ることのできる能力を伸ばしていきたい。そして、様々な事象を心に感じ取り、自分なりの意味や価値をつくり出すことのできる児童を育てていきたいと思う。